

社長所感（平成 29 年 5 月）

風薫る頃、街に、行楽、コンサート、展覧会などの案内が目立つようになりました。

それで、先日、恵比須の「山種美術館」に行き、横山大観、小林古徑、奥村土牛、東山魁夷などの日本画を楽しんできました。

山種美術館は、一代で株屋として財を築いた山崎種二さんが収集した美術品を収蔵、公開する美術館で、現在は孫娘の山崎妙子さんが館長を務めておられます。

山崎種二さんは、米屋の小僧から仕事をはじめ、株で着実に財をなし、山種証券を創業したという立志伝中の人物です。

城山三郎の経済小説『百戦百勝』のモデルで、大きな福耳でよく人の話を聞くなど情報収集の努力を惜しまなかったことや米のご飯が何より好きだったことなどがユーモラスな筆致で描かれています。

その山崎種二さんが、財を成してから、趣味で日本画を収集し始めましたが、ある時ニセ物をつかまされ、それに懲りたので、爾来、上掲の画家たちと親交を深め、別荘に滞在してもらって、そこで描いてもらった画を購入するという方法に切り替えます。

これなら、間違いなく本物です。

こうした日本画に加え、山種美術館には安宅産業の安宅英一さんが集めた速水御舟作品集などのコレクションもあります。

安宅産業は、十大商社の一つでしたが、北米への投資事業（カナダの NRC という石油精製会社の信用不安を解消するための仲介事業）が焦げ付き、昭和 50 年（1975 年）当方で 1,000 億円強の不良債権を抱えることとなり、安宅本社の存続すら危うい状況に陥りました。

破産という手法もあったのですが、それでは日本の商社の国際的信用が揺らぎ貿易立国日本の基礎が崩れますので、メインバンクの住友銀行（現在の三井住友銀行）、日本銀行、伊藤忠商事などが力を合わせて伊藤忠商事への吸収という形で救済しました。

その救済の一環として、山種美術館が安宅コレクションの一部を購入したという次第。

当時は、メインバンクが後ろ盾となって、関係者に働きかけて事態の收拾をはかるという、大きく言えば保険のような役割を果たしていたのですね。

最近、この安宅と同様に、北米への投資事業の失敗から日本の本社の存続まで危ぶまれることとなった例に、アメリカの原子炉メーカー WH 社を買収した東芝があります。

再々の決算発表の延期、監査法人のお墨付きのない決算発表…など、まだまだ先が見えない状況です。メインバンクも、安宅救済の頃と違って、長引く低金利で体力がなく、十分な後ろ盾の役割を果たせなくなっているようです。

どのような收拾になるのか、現時点で見通すのは困難ですが、折角の東芝の技術が海外流失して科学立国日本の基礎が崩れてしまうような事態收拾だけは避けていただきたいと願うところです。

青葉、若葉のこの時期、古い芝から新しい芝への上手い代替わりを望んでいます。